



比較的早期の胆嚢癌に関する病理学的研究 一全層胆摘術の意義に関連して一

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 浜松医科大学 公開日: 2014-10-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 脇, 正志 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10271/1354

学位論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

学位記番号	医博論第 77号	学位授与年月日	平成 元年11月 3日
氏 名	脇 正 志		
論文題目	比較的早期の胆嚢癌に関する病理学的研究 —全層胆摘術の意義に関連して—		

論文の内容の要旨

胆嚢癌は消化器癌のなかでもとりわけ予後の悪い疾患として知られている。近年の超音波診断をはじめとする画像診断の発達によって胆嚢の隆起性病変が多数発見されるようになったが、比較的早いステージの胆嚢癌は、現在でも術前診断が困難で、しかもどのような外科治療がなされたかによって予後に大きな差があることで特に注目されている。現在までのところ肉眼的に胆嚢壁内に限局したステージの胆嚢癌に対する癌進展様式に関しては、まとまった数の報告がない。そこでこれらの癌の標本の病理的検索による癌の進展の特徴に関する検討を行い、合わせてそれらに対する合理的切除法を検討した。

胆嚢癌の生存期間は過去の文献からその壁深達度に最も相関が深いので、進行癌の中では壁深達度の低いss癌に注目した。浜松医大第一外科と志太総合病院外科で切除された25例のss胆嚢癌の標本と、胆石症で切除された40例の永久標本を用いた。

胆嚢癌臨床例では25例をその主たる占居部位別に進展様式の相違をみるため、底部13例、体部5例、頸部及び胆嚢管7例の三群に分けて、標本を5mm間隔に全割し、光顕下に観察した。その結果、

①占居部位にかかわらず漿膜下の癌の進展は横軸方向と縦軸頸部側方向が優位で、垂直の肝実質方向や底部側へはほとんど進展がみられない。

②頸部や胆嚢管に肉眼的に癌を認めた標本では、例外なく肝管周囲を中心とする肝十二指腸間膜内に癌の進展がみられること。

の二点が指摘できた。この所見は過去の不十分な切除後の再発の様式とも一致した。そこで、粘膜に発生した胆嚢癌は、胆嚢壁内を表層拡大するとともに筋層を越えて漿膜下のリンパ管網にのって漿膜下を肝十二指腸間膜方向に進展するものであり、肝実質方向へはその段階ではむしろ広がりにくい一時期があるのではないかと考えた。そこで、粘膜筋層を越えて漿膜下層に進展した癌ではリンパの流出経路を重視して切除を加えるべきことが重要であり、通常の胆摘例では不十分に切除される肝床面に対する全層胆摘術を検討した。

胆石症標本では20例で通常の摘除手術を、残り20例では全層胆摘術を施行し、それぞれをホルマリン充填のうえで輪切り標本を三箇所とり、光顕下に比較検討した。その結果、通常行われている胆摘術では肝付着面で底、体部のみならず頸部でも筋膜下すなわち漿膜下層が欠損しているのに対し、全層胆摘術では漿膜下層が十分切除されていた。

比較的早期の胆嚢癌では、その進展は粘膜上を表層拡大するとともに筋層を越えて漿膜下のリンパ管網に入り、胆嚢壁内を主に頸部方向に拡大して行くと考えられる。副論文中の剖検例の肝床面の観察でも、この最外層リンパ管網の流出経路の存在が明らかであった。

以上のことから、潜在性の胆嚢癌の疑われる胆摘術では、まず全層胆摘を行い、術中の胆嚢の粘膜面からの観察で癌の存在とその占居部位を見極め、占居部位に応じてその場で付加手術を追加することで比較的早期の胆嚢癌の外科的治療成績を向上し得ることを述べた。

論文審査の結果の要旨

胆嚢は底部、体部、頸部の3部からなる袋状臓器であり、その薄い壁は肝床面と肝十二指腸間膜の結合組織及びリンパ管系を介して肝実質と組織学的に連絡している。したがって、胆嚢癌の治療に際しては肝臓への転移の有無が重要な問題である。とくに、比較的早期の癌は術前診断が困難であるだけでなく、壁深達度や手術術式の違いでその予後や生存期間も異なる症例が多く、その適切な診断法と手術術式の確立が求められているところである。そこで、申請者は、癌の壁深達度の比較的浅いss癌や、術前診断で癌と疑わしい症例について、種々の術式によって胆嚢を摘出し、摘出癌組織の病理学的検索をおこない、癌の進展の特徴を明らかにするとともに、予後や転移を追跡し、それらの結果をもとに適切な手術術式として全層胆摘術の

有用性を明らかにしようとした。また、胆嚢と肝実質との組織学的連続性やリンパ管系による連絡についても解剖学的検索をおこなった。

評価された主な結果は次のとおりである。

- 1) 診断の困難な比較的早期の胆嚢癌症例(65例)について詳細な病理学的検索をおこなった。
- 2) 頸部や胆嚢管のss癌は主に肝十二指腸間膜を経て肝門側へ向って進展する。
- 3) ss癌の再発は、肝床面組織とそれにつづく総胆管周囲の間質の不十分な除去と、不完全なリンパ節郭清に主に起因する。
- 4) 胆石症を伴うss癌に対し、肝床部切除を含む全層胆摘、或いはその切除を含まない通常胆摘を施した症例の比較検索から、前者は後者に比べ肝床付着面での漿膜下層がより確実に切除されていたことを確認した。
- 5) 肝床面はうすい結合組織性境界膜を介して肝実質と接し、そこに例外なく豊富なリンパ管網が発達していることを示し、それが肝十二指腸間膜内リンパ管へ連絡することを示した。

以上の所見から申請者は、比較的早期の胆嚢癌は粘膜層にそって表層拡大するとともに、筋層をこえて漿膜下に及び、そのリンパ管網を介して頸部方向へ、さらに肝十二指腸間膜へ拡大することを主張し、さらに、比較的早期の癌やそれが疑われる症例に対して全層胆摘を行うことは、転移や再発を抑制する上で有用であると推論している。

これらの結果及び見解は、比較的早期の胆嚢癌のリンパ行性進展様式と全層胆摘の有用性を明らかにしているとして、審査委員全員から高い評価が与えられ、今後の発展が期待された。

以上の成果に対し、下記の諸点について質問と問題点の指摘がなされた。

- 1) 全層胆摘術に関して、その定義、独創性、適応症、有効性、短所等。
- 2) ss胆嚢癌を比較的早期の癌と判断する根拠。
- 3) 潜在性癌のとらえ方について。
- 4) 通常胆摘と全層胆摘を受けた症例の予後の比較検討。
- 5) 胆石症や炎症を併発した場合と、併発しない場合のss癌に対する治療法の違い。
- 6) リンパ管の分布・走行の検索法に関する再検討。
- 7) 肝床部におけるリンパ管分布・走行に関する所見の再検討。

以上の点に対し、申請者はおおむね適正な解答をするとともに、残された問題については現在検討を進めている旨の応答がなされた。

以上の審査の結果、本論文は学位授与に値する十分な内容を備えているものと全員一致で判定した。

論文審査担当者 主査 教授 山下 昭

副査 副学長 阪口 周吉 副査 教授 喜納 勇

副査 助教授 金子 栄蔵 副査 講師 宮原 透